

E. M. フォースターとヴァージニア・ウルフ に学んだこと

向 井 千代子¹

はじめに

私は常々教育の目的は自分の頭で考えられる人間を作ることであると思っています。そしてそのような人間を作るための一助として「読書」があり、「文学」があると考えています。私自身、学者としてあまり大した実績はありませんが、自分の人生観に大きな影響を与えた二人の作家、E.M.フォースターとヴァージニア・ウルフについて今日はなるべくわかりやすくお話いたします。と言いましても詳しく語りますと一時間では終わらないので、二人の考え方で私にとって特に興味があり、自分の人生観を作る上での参考になったことをご紹介します。

1. フォースターについて

まずフォースターとの出会いですが、大学3年生の、ちょうど卒論のテーマを決めるときに読んでいたのが、スティーヴン・スペンダーの『世界の中の世界』(World Within World, 1951)でした。その中に次のような一節がありました。

¹ 白鷗大学教育学部

私の賞賛する人の名にE.M.フォースターの名を付け加えなければなるまい。彼は今世紀のイギリスの生んだ、最も優れた小説家であり、最も鋭いモラリストである。しかし、フォースターの中にはいろんな性格が奇妙に入り混じっているので、彼をグループに結び付けることも、友人たちに結び付けることもできない。控えめな態度と断固たる自己主張、気まぐれと非常な綿密さ、異教的な無道徳と倫理問題への激しい執着、自己を愛する気持ちと厳しい自己訓練——こういった相矛盾する性格が、彼のなかで一つになっている。彼は現代作家の中で最も愉快で、最も不愉快な作家である。(第三章)

これを読んで卒論のテーマをフォースターに決めました。スペンダーも言っているように、フォースターは様々な相矛盾する性格を抱え込んだ作家ですが、私の一番好きな彼の特性はユーモアです。彼の特に愛好する作家はチャールズ・ディッケンズとジェイン・オースティンで、彼のユーモアはこの二人から学んだものかもしれません。

彼がホモ・セクシュアルであることは生前もその噂はありましたが、死後はっきりと明らかにされ、『モーリス』(*Maurice*, 1971) という同性愛を扱った小説が死後出版されています。この作品は実際には1913～14年にかけて書かれたものですが、イギリスでは1967年まで同性愛を罪とする法律があったために出版を差し控えたものです。

彼は早熟な作家で、初期の3作は1905年から30歳までに書き上げられています。『ハワーズ・エンド』(*Howards End*, 1910) を出したのが32歳、それから10年以上経って『インドへの道』(*A Passage to India*, 1924) を出し、後は小説以外のものを書いて、91歳まで生きました。(未完に終わった小説や、同性愛を扱ったものを含むいくつかの短編が死後出版されています。)

彼が小説を書かなくなった理由はこの同性愛にあるのではないかと私は長い間思っていました、もしかするとそうではないかもしれません。

余談ですが、ステイーヴン・スペンダーも最初は同性愛者でしたが、途

中で異性愛者になった作家です。そのことを堂々と自伝の中で書いているのですから、イギリスの同性愛を禁ずるという法律も微妙なものです。同性愛であっても堂々とおおびらにせず、こそこそと隠れてやっていればOKという社会です。

フォースターの作品のうち、「古典的」といえるレベルに達しているのは『ハワーズ・エンド』と『インドへの道』ですが、私は初期の3作が若い人に読まれるべき作品と思っています。フォースターの作品にはジェイン・オースティンのようなところがあります。それは筋の展開の中で主人公ないし女主人公が真の自己に目覚めるという「自己発見」(self-discovery)のパターンを使っていることです。ただフォースターの場合、その「目覚め」の儀式に終わりがなく、常に脱皮に継ぐ脱皮で、いつもぶつかるのは「自分の虚偽」であるというようなところがあります。

では人物たちは何から脱皮するのかというと、「自分の偏見」からです。私たちが気づかぬうちに抱えている因習的でパターン化された物の考え方というものをフォースターは笑います。しかし、そうした因習が知らず知らずのうちに不正を行うとき、フォースターは許しません。そしてそのような批判力は、フォースター自身の属するイギリスの中産階級に対してもっとも手厳しくなります。

人物の虚偽を暴く道具としてフォースターが導入するのは異なる階級もしくは異なる人種の人たちです。これらの人物は、原始的で粗野で、健康的で、因習にとらわれない行動をします。彼らのもたらす高笑いがフォースターの小説に一種爽快な風を送ってくれます。

例えば『眺めのある部屋』(A Room with a View, 1908) に水浴の場面があります。森の中の池のようなところで、普通なら取り澄ましている牧師までが、若者たちに誘われて水を浴び、裸で追いかっこをしています。そこへ女性を含めた中産階級のお上品な人たちが通りかかります。

人間なんて実際は本人が思い込んでいるほどお上品なものではない、というような考えがここにはうかがわれます。人と自然との対立の中から文

明が生まれたという側面もありますが、人間もまた自然の一部です。自然の一部としての人間という考え方がフォースターにはあります。

次にフォースターの小説に出てくる二つのキーワードを紹介することになります。

① 混乱 (muddleness)

これはフォースターの小説に良く出てくる言葉であり、彼の小説の劇的展開の原動力となるものです。例えば『眺めのある部屋』の19章で、女主人公ルーシーが老エマーソン氏に対して嘘をついてしまうのですが、その嘘を見破ったエマーソン氏は次のように諭します。

「老人の話を聞きなさい。世界中で混乱ほど悪いものはありません。死や運命や、恐ろしく思えるものに直面するのはやさしいことです。でも私が本当に恐ろしい思いで振り返るのは、自分の混乱の経験です。避けられたかもしれない事柄のことです。私たちはお互いにほんの少ししか助け合えません。(中略) 混乱に注意することです。覚えていますか、あの教会で、あなたが私のことを迷惑に思っていないのに、迷惑だというふりをした時のことを。それ以前に、眺めのある部屋を断った時のことを覚えておいでですか。ああいったことが混乱です。ほんの些細なことですが、不吉です。今のあなたもそういう混乱に陥っているのではないかと思います」(246)

‘muddleness’は「混乱」のほかに「混同」などとも訳せますが、自分の中に相反する感情や判断があって、それらが衝突して正常な判断を下せなくなる状態です。そんなとき、私たちは判断の間違いを犯し、自分に嘘をついてしまうのです。エマーソン氏も「自分の混乱の経験を思い出す」と言っていますが、私自身にもいくつかそんな苦い経験があります。『眺めのある部屋』でルーシーが旅先で出会ったジョージ・エマーソンへの愛を認

めるのに時間がかかるのは、ジョージがルーシーの育った階層の人たちとは少し下の階層に属しており、今まで彼女が慣れ親しんでいた価値観とは違った価値観を持っているためです。

「マドルネス」は登場人物が自分の価値観への挑戦を迫られたときに起きる現象です。ですからこの概念は道徳的な概念 (moralistic idea) でもあります。『インドへの道』ではこの問題が植民地主義の問題ともかかわってくるので、深刻な人種差別問題や異文化間コミュニケーションの問題をも含むものとなっています。

② 永遠の瞬間 (The Eternal Moment)

「永遠の瞬間」という考えもまたフォースターに独特の考えですが、この瞬間にも往々にして「混乱」が起きます。「永遠の瞬間」の定義として最もわかりやすいのは、フォースターの自伝的作品と言われている『ザ・ロングゲスト・ジャーニー』(*The Longest Journey*, 1907) に出てくる次のような言葉です。

「人生ではあちこちで象徴的な人物なり事件なりに出会うことがあるように思う。それ自体は大したことじゃないが、その一瞬だけ何か、永遠の原理を表わしている。どんな犠牲を払っても、それを受け入れるならば、人生を受け入れたことになる。だが、もし恐怖に駆られて拒絶すれば、その瞬間はいわば消えてしまう。そしてその象徴は二度と与えられることはない。」(142)

人生にある「象徴的な瞬間」である「永遠の瞬間」という考えは、誰にでもあり、受け入れやすいものだと思います。しかしフォースターの場合、その瞬間を捉えそこねた場面の方が多く描かれています。例えば「永遠の瞬間」(“The Eternal Moment”) という短編では、昔行った観光地でガイドのイタリア人の青年から求婚された思い出がある中年の女性作家が、再び

その地を訪れます。するとあの美青年だった男がいやらしい中年男になり果てており、観光地も自分の小説のために有名になり、俗化してしまったことを知り、かつて自分が求婚された瞬間こそが「永遠の瞬間」であったことを悟るという内容です。

③ 「私の信条」“What I Believe”：人間関係・友情の大切さ

最後にフォースターは人間関係、ことに友情を大切にする作家であるということを強調してフォースターの話は終わりにしようと思います。その一例として『民主主義に万歳二唱』(Two Cheers for Democracy, 1951)の中にある「私の信条」というエッセイを紹介します。

「私は絶対的信条を信じない」と言う言葉でフォースターはこのエッセイを始めます。だが「信条の時代」に生きているので、強いて言えば自分は個人的人間関係を信じる、と続けます。

個人的人間関係は、今日では軽蔑されている。ブルジョワ的な贅沢であり、すでに過去になった幸福な時代の遺物だとみられて、そんなものは捨ててしまえ、それよりも何か政治的な運動とか主義に身を捧げろとせつつかれる。私は、この主義というのが嫌いで、国家を裏切るか友を裏切るかと迫られたときには、国家を裏切る勇気をもちたいと思う。こんな選択をすれば現代の読者は憤慨して、即座にその愛国的な手を電話にのぼし、警察に通報するかもしれない。だが、ダンテなら驚かなかっただろう。…たしかに、これほど苦しい選択を迫られることはまずないだろう。それでも、あらゆる信条の背後には、過酷で容赦しない、それを奉じるものがいつかは苦しむ羽目に陥りかねないものが潜んでいるのであって、個人的人間関係と言う心情も、その優雅で優しい響きにもかかわらず、過酷な恐ろしいものを秘めているのである。一人の人間にたいする愛と誠実が、国家の要求と相いれない場合があるのだ。そうなったときは——国家を倒せ、と言いたいが、そうすれば自分が国家に倒さ

れかねないのである。(105-106 小野寺健記)

この後に「民主主義に万歳二唱」という言葉が出てきます。

というわけで、民主主義には二度万歳をしよう。一度目は、多様性を許すからであり、二度目は批判を許すからである。ただし、二度で充分。三度も喝采することはない。三度の喝采に値するのは「わが恋人、慕わしき共和国」だけである。(107-108)

最後の方には次のような言葉が出てきます。

個人主義の方は、捨てようとしても捨てられそうにはない。英雄的な独裁者は、国民が全員同じになるまで弾圧をくわえるかもしれないが、全員を溶かして一人の人間にできるわけではない。そんな力は彼にもないのだ。一つになれ、と命令することはできるだろう。狂気の踊りに駆り立てることもできるかもしれない。しかし、国民は一人ひとりべつべつに生まれ、べつべつに死んでいくほかはなく、この不可避の終着点がある以上、どうしても全体主義のレールからは脱線してしまうのである。…裸でこの世に生まれてきた私は、裸でこの世を去っていく！これは、またすばらしいことなのである。おかげでシャツの色は何色でも、その下の自分は裸であることに気が付くのだから。(116)

これは1938年に発表されたもので、1938年といえば第二次世界大戦が始まろうとしていた時代です。そういう時にこんなことを言えたというだけでも私はフォースターを尊敬します。

2. ヴァージニア・ウルフについて

ウルフとの出会いはやはり大学3、4年生の時で、『波』(The Waves, 1931)を初めて買って読んだときのことです。ウルフの小説は実験的な手法の小説が多いのですが、『波』は散文詩的な海辺の風景描写と6人の人物の独白とから成ります。その独白は人物が実際に声に出して言ったことというよりも、彼らが心の中で思っていることです。普通私たちも心の中で考えたりしますが、実際にはいろいろな行動の合間に、相手の言動を見たりしていろいろ感じているというのが実情であって、この作品のように独白を整然と続けるわけではありません。とにかくこの作品の書き出しの数ページを読んだとき、私は自分の書きたかった小説はこんな感じの小説だったと思い、衝撃を受けました。その頃の私は小説家志望でして、特にドストエフスキー(1821-1881)の『地下生活者の手記』がお気に入り、あんな作品が書きたいと思っていました。ただし『地下生活者の手記』は語り手が一人で、その人物が色々が悪態をついたりしつつ、独白を際限なく続けるという小説です。それに対してこの『波』は独白の主が6人で、6人の人生の流れを、絵を描くように独白体で書きつづるという一風変わった小説です。ウルフと私の付き合いも長いので、ウルフの特徴のすべてをここで述べることはできませんが、特に興味を持った点だけをいくつか紹介することにいたします。

① 「夜と昼」(Night and Day)／心の世界と行動の世界の乖離

ウルフの第二作の『夜と昼』の主人公はキャサリン・ヒルベリーと言い、祖父が有名な詩人で、母は父の伝記を執筆中で、彼女の家にはしょっちゅうお客様が訪れ、彼女がお相手をしなければならないという家で、ちょっとウルフ自身の家庭に似た設定になっています。ウルフの父親はレズリー・スティーヴン(Leslie Stephen, 1832-1904)という人で、ヴィクトリア朝の文人として有名な人でした。代表作は『18世紀イギリス思想史』というも

のです。『イギリス人名事典』の編集主任でもありました。この小説のタイトルになった「夜と昼」に関連した一節を引用します。

どうして考えることと行動の間、孤独の中の生活と社会での生活の間にはこのような絶え間ない不一致があるのだろうか。この驚くような断崖の片側では魂が真昼間の明かりの中で生き生きと活動しているのに、その反対側では魂は内省的で夜のように暗い。一方からもう一方へとまっすぐに基本的な変化なしに渡ることは不可能なのだろうか。(358-359)

ここで面白いと思うのは、ウルフの場合、意識が生き生きと働く世界が昼で、社会生活もしくは社交生活においては意識の活動が抑えられていて、夜に例えられているということです。これがウルフの出発点です。つまり頭の中ではいろいろ考えていても、社会生活の中では沈黙を守り、自分を表現しえていない。それはウルフがヴィクトリア朝の末期に育った女性であったからです。女性が思ったことを口にできないような雰囲気がその時代にはあったからで、思っても言わないことが育ちの良い女性のたしなみでもあったのでしょう。そこでウルフは第一作の『船出』(*The Voyage Out*, 1915)では登場人物の一人、ヒューイト(小説家志望の男性)の口を借りて「自分は沈黙についての小説、つまり人々が口に出して言わないことについての小説を書きたい」と言わせています。やがてウルフが「意識の流れ」の手法を使った小説を書くことになる下地がここにすでに表れています。

② 「家の中の天使」(*The Angel in the House*)：女性を縛るもの

1931年の一月に英国女性奉仕協会(National Society for Women's Service)で行った講演をもとにしたエッセイ「女性の職業」(“Professions for Woman”)に「家の中の天使」という言葉が出てきます。それは彼女の育ったヴィクトリア朝時代の理想的な女性像としてCoventry Patmoreの

同名の詩に描かれたもので、その理想像が自分を縛っていたということを言っています。引用します。

そして私がこの評論を書いている間に、書評を書こうとするなら、ある幻影（phantom）と格闘する必要があることに気付きました。その幻影は女性でして、もっと彼女のことを知るようになってからは彼女のことを有名な「家の中の天使」の女主人公の名で呼ぶようになりました。私を悩ませ、私の時間を無駄にさせたのは彼女でした。あまり悩まされたものですから最後には彼女を殺してしまいました。（102）

どうしてかという、この理想的な女性は「女性というものは自己犠牲的で、献身的で、人を批判したりするものではない、家の中の天使としてふるまわなければならない」と言うので、批評的な仕事ができなくなるわけです。ウルフは小説を書く前は「タイムズ紙」という新聞の日曜版の書評家としてたくさんの書評を書いておりました。それは無署名の記事でして、男が書いているか女が書いているかわからないようになっていました。「女はこうでなくてはならない」という固定観念に縛られていると、批評的な仕事はできないわけです。そのことをこのエッセイは巧みに語っています。

というのは私が紙の上にペンを置くや否や、自分自身の考えを持っていなければ、人間関係や道徳、性の問題について何が真実かを表現できなければ、小説一つでさえ批評できません。そしてこういったすべての問題は、「家の中の天使」によれば、女性が自由に率直に扱うことはできないのです。女性は人を魅了し、和解させ、はっきり言えば、成功するためには嘘をつかなければならないのです。というわけで、私は私の紙のページの上に彼女の翼の影や彼女の後光を認めるたびに、インク壺を取り上げて彼女に投げつけました。なかなか死にませんでした。（中略）

現実のものより、幻影を殺す方がずっと難しいのです。(中略)「家の中の天使」を殺すことは女性作家の仕事の一部です。(103)

この後にウルフは「家の中の天使」を自分は殺すことはできたけれども、まだ女性の肉体の経験を表現できていない、と言います。まだまだ戦いは続くのです、と言っています。やはり最後の方で言っているのですが、文学というのは女性の職業の内でも最も自由が許される職業であるので、他の分野で活躍しようとしている女性はもっともっと大変な思いをすることでしょう、と言っています。

私はウルフがフェミニストなのでウルフを研究するようになったわけではありませんが、ウルフを読むうちに自分の中にも自分を縛る考えがあることに気付きました。自分が少しでも女性としての意識を解放できたのはウルフのおかげかもしれません。

③ 『灯台へ』(*To the Lighthouse*, 1919):「何事も単純に一つのものではない」

この言葉は『灯台へ』の第三部のジェイムズの心の中の言葉として出てきます。この作品はウルフの自伝的作品と言われています。ラムゼイ氏は大学の哲学の教授で、スコットランドの島に夏の別荘があります。子供たちも多く、一家の中心となっているのがラムゼイ夫人です。第一部「窓」で企画された、近くの燈台のある島への遠出のプランが、第一次世界大戦をはさんだ10年後（その間に夫人は亡くなります）の第3部で果たされるという構成になっています。

ジェイムズは灯台を見た。波に洗われて白くなった岩々が見えた。固くまっすぐの塔、それに黒と白の縞模様が付いているのが見えた。窓が見えた。(中略) そうかあれが灯台だったのか。いやもう一つのも灯台だ。だって何事もただ単純に一つのものではないのだから。湾を隔ててほとんど見えないこともあった。夕方に見上げると、灯台がその眼を開いた

り閉じたりして、僕たちの座っている風通しがよく日当たりのよい庭のところまで光が届くようだった。(286)

ここでジェイムズが認識するのは遠くから見た灯台も近くから見た灯台もどちらも灯台についての真実であるということです。ジェイムズは幼いときに母と自分との一体化を妨げようとする父親にエディプス・コンプレックス的な殺意を感じたことがあります、その頃から10年たって10年前に中止した灯台への訪問を父親と姉と一緒に実現させます。とうとう灯台へ到着しようとする直前にこのような感慨を抱きます。ごつごつした灯台を受け入れることは事実を重視する父を認めることであり、昔遠くから見た夢のような光を放つ灯台を受け入れることは母を受け入れることにつながります。客観的事実と主観的真実との双方を認めて初めて、人はバランスの取れた認識や判断を得られるという含みがこの文章には感じられます。『灯台へ』は父親と母親双方の肖像をウルフが自分なりに描こうとした作品で、この作品を書いたことによってウルフは父親への恨みと言いますか、怒りを克服できたのだと思います。

④ 『3 ギニー』(Three Guineas, 1938)：女性と戦争・個と国家

ウルフのフェミニズムを表明したエッセイとしては「女性と文学」を扱った『私自身の部屋』(1929)が有名です。その中で彼女は「女性が自立するためには自分だけの部屋とある程度の収入が必要だ」と言っています。その他に有名な言葉としては「女性は長い間男性の姿を二倍にも三倍にも大きくして見せる鏡の役割をしてきた」という指摘があります。また最後の方には「作家は両性具有でなければならない」という言葉も出てきます。

しかし今日は彼女が「女性と戦争」について書いた『3 ギニー』の中に出てくる個人と国家の関係についての彼女の考えを紹介します。ギニーというのは金貨で、ウルフの当時21シリングの価値のあるお金の単位で、弁護士や医師への謝礼や公共団体への寄付などの時のよく使われたというこ

とです。この作品で彼女は「戦争に反対する団体から寄付をしてくれという手紙をある中産階級の男性から受け取ったのだが」と書き出します。そして「自分は3年間返事を書かなかったのだが、今書く」と言います。女性はずっと好戦的でないので戦争には反対である。だがその気持ちを有効に表現する道を女性は持っていない。女性には政治的・経済的に影響力をふるう道が閉ざされている。だからまず私は女性の大学を再建するための寄付を募る団体に対して一ギニーを寄付する、と言います。それが間接的に戦争阻止につながるだろうと言うのです。次に今度は女性の職業の問題に移り、女性が専門職に就くことを助ける協会へ一ギニー寄付すると言います。最後の残りの一ギニーを寄付を要求してきた最初の団体へ寄付すると結論します。その最後の部分で、女性はアウトサイダーだということを述べ、女性たちは「アウトサイダーの協会」を作るべきだと唱えるのですが、その協会とは非常に変わった協会であり、いわゆる組織的な会のことではないのです。これはおそらくアウトサイダーとしての意識に目覚めた個々の女性たちの存在そのものが、精神的にも経済的にも独立を勝ち取り、女性の視点から発言していくことにつながるというウルフ独自の考えの表現ではないかと思います。

イギリスにおいて女性の参政権が獲得されたのは1919年のことで、この本の出版された1938年には20年くらいたっているのです、以前よりは女性の力は強くなっていたと考えられます。『3ギニー』の最後の部分で、ウルフは個人の世界と公的な世界との関連性を強調します。私にはその部分が一番素晴らしい指摘であると思うので、ここに紹介します。ここでウルフは参政権を得た今も、「女性には恐怖心がある」として次のように説明しています。

その恐怖心はちっぽけでつまらない個人的なものではあるが、別の恐怖心すなわち公的な恐怖心と関連がある。すなわちちっぽけでも取るに足らないものでもなく、あなた方（＝男性）が私たち（＝女性）に戦争阻止

のために助力してほしいと頼むことになった恐怖心と関係がある。(257)

として「国家」という形での圧力を指摘します。

これは公的な世界と個人的な世界とが分かちがたく結びついていること、一方における圧政と隷属は他方における圧政と隷属であることを暗示している。(中略) 私たちはその姿から私たちを切り離すことはできず、私たち自身がその姿であるということを暗示している。つまり、私たちは無抵抗のうちに従うことを運命づけられた受け身の見物人ではなくて、私たちの思想と行動によって私たち自身でその姿を変えることが出来るということを暗示している。共通の利害が私たちを結び付ける。それは同じ一つの世界、同じ一つの生活なのだ。(259)

ここで言う私たちとは、男性女性両方を含めた、平和を願う人たちのことです。

ここで、今も、あなたからの手紙は私たちに誘いかける。これらの些末な事実には耳を傾けないで、銃声…には耳を傾けずに、相呼応して私たちに、さまざまの相違を、チョークで書いた印に過ぎぬものであるかのよう消してくれる統合（ユニティ）を確信させる詩人たちの声に耳傾けるように、と。限界を乗り越えて、多様性の中から統合を作り出す人間精神の能力についてともに論じようと誘いかける。しかし、それは夢であろう——歴史の初めから人間の心に付きまとして繰り返し現れる夢。平和の夢。自由の夢。(259)

『3ギニー』はイギリスがドイツとの戦争に向かおうとしている時代に書かれた反戦の書であるために、出版当時評判が悪かったということですが、時を経て今読むと、時にウルフの怒りが感じられ、バランスを欠く部分は

あるものの、ウルフが勇気をもって熱弁をふるった感動的な作品です。特に個人の世界の抑圧と公的世界（国家など）における抑圧とが関連があることを指摘したところなど非常に鋭いと言わなければなりません。

国というのは権力機構です。権力機構であるから権力をふるうのは当たり前とはいえ、民主主義の社会にあつてさえ、一党支配があまりに強力過ぎれば理不尽と思われることも簡単に決めることができるのであるから、私たちは注意しなければなりません。個人の生活さえ民主化されていればよいかと言えばそうはいかないし、また社会全体の理念が非常に平等に出来上がっている、個々の家庭の事情の中で、非常に暴力的な家庭があったりしたら、それも問題です。そういう問題について考えさせてくれるということだけでも私はウルフに感謝しています

⑤ 「存在の瞬間」(Moments of Being)

「存在の瞬間」という考えは死後出版の自伝的断片集『存在の瞬間』(Moments of Being, 1976) に示されているもので、ウルフの基本的な概念です。ウルフは人生には二種の存在様式があるとして、それらを「存在の瞬間」(Moments of Being) と「非存在の瞬間」(Moments of Non-being) と名付けます。過去を振り返った場合思い出に残っている事柄が「存在の瞬間」であり、忘れてしまった事柄が「非存在の瞬間」です。しかしその両方とも大切であるとウルフは考えます。小説家はこの両方を書けなければならないが、自分は「非存在の瞬間」を書くのが不得手であると言っています。

次に「存在の瞬間」を分析して、「存在の瞬間」には二種類あると言います。一つは圧倒的に恐怖と無力感を伴うものであり、もう一つは圧倒的な満足感を伴う。しかし、この前者も、人が長ずるにつれて、歓迎すべき瞬間に変わってゆく。なぜなら理性の力でその瞬間のはらむ意味を説明することが徐々にできるようになるからである。そしてこのような「ショックを受ける能力こそ私を作家にしたものである」と言います。

私は打撃を受けたと思う。が、それは子供の頃の私が考えたような、単なる綿毛のような日常の背後に隠れた敵からの打撃ではなくて、それはある秩序の啓示もしくは啓示となるべきものである。それは外見の背後に潜む本質的な何ものかの印であり、そしてそれを言葉に置き換えることによって現実のものにするのである。言葉で表現して初めて、私はそれを完全なものにできるのだ。この完全さとは何かというと、そうするとそれは私を傷つける力を失うからである。たぶん、そうすることによって苦痛を取り去ることが出来るために、それはいくつかの部分を結合したかのような非常な喜びを私に与えてくれる。(72)

これはウルフの創作の秘密のようなものを語っていると思います。人はなぜ語るか、なぜ書くか。自分の経験を自分の言葉で表現することによって得られる何か、それを事物の背後に存在する「パターン」であるともウルフは言っているのですが、本当はそれほど簡単ではないと思います。しかし精神的な病を患っていたウルフが59歳で自殺を遂げるまで、果敢に戦っていた相手、家父長主義的な個人及び国家というものを考えてみますと、パターンという芸術的な表現を使っていますが、本当はもっと深い意味を込めていたのかもしれません。

私自身詩などを書いています、そのとき思うのは、「これは過去を反芻するようなものだ」ということです。人は原点となった出来事について何回も何回も語ります。語るたびに語る角度が変わったりします。それを繰り返すうちに人は現象をいろんな角度から見る事が出来るようになり、ついには深い理解に達することがあります。そのことをウルフは言っているのだと思います。

⑥ 「重要なのは生きることだ。生きること以外の何物でもない。」

：What matters is the journey itself, not the end.

『夜と昼』の138ページで女主人公のキャサリンは歩きながら次のように

つぶやきます。

「重要なのは生きることだ。生きること以外の何物でもない。それは発見の過程、永久に絶え間なく続く過程である。」…「発見そのものが大切なのではない。」

そのあとの説明によると、「これはドストエフスキーの言葉をもじって、自分に合うようにしたもので、『発見のプロセスが人生である、おそらく目的地に達するかどうかは全く重要ではない』と主張するものである」とあります。これと似た言葉を私は『地下生活者の手記』で見たと思いますが、一般的には『悪霊』に出てくる言葉だと言われています。ところでウルフの夫のLeonard Woolfもこの言葉を深く胸に秘めていたらしく、彼が晩年に書いた自伝の最終巻のタイトルは『到達点でなく、旅の過程が大切』(*The Journey not the Arrival Matters*) となっています。先日この巻を読んでいたなら、そこにはこれはモンテーニュ (1533-1592) の言葉だとしてこう書いてありました。

‘It is not the arrival, it is the journey which matters.’ (大切なのは旅の過程であって、到達点ではない。) (172)

ドストエフスキーも似たようなことを書いているけれども、モンテーニュも同じことを書いているのでしょう。もしかするとドストエフスキーもモンテーニュを下敷きとしてこの言葉を書いたのかもしれませんが。この言葉も私にとっては学ぶべきことの多い言葉です。自分の人生の成果がどれほどのものであるにしても、そんなことは考えずに、生きる一瞬一瞬の過程を大切にして、誠実に生きる、私たちのすべきことはそれだけなのではないでしょうか。

3. 最後に

最後に私にはどうしてフォースターとウルフという二人の作家が必要であつたかというお話をします。ウルフは女性ですし、フェミニズムという点でも大きな影響を与えられましたし、文学史的にも「意識の流れの作家」、実験的な手法の小説を書いたということでも注目されています。しかしウルフだけだと、どうしても真面目すぎて窮屈なところが出てきます。最後の作品の『幕間』(*Between the Acts*, 1941)などはウルフにしては珍しくコミックな場面もあるのですが、ウルフの本質は物事を突き詰めて、理詰めにこれでもか、これでもかと考えるところにあり、疲れが来るのですが、フォースターにはおおらかな笑いのようなものがあります。それは人間の生活を人間以外の「自然」の視点から見ようとする姿勢でもありまして、それがフォースターの魅力となっています。この二人の作家と付き合ってきたおかげで、私も物事をいろんな視点、立場から考えることが出来ました。本当に良かったと思っています。

人は一生が学びの連続です。物事はそれを見る人の数だけ真実がある、というのも真理ならば、その中でまたすべてに通用する真実もあるのではないか、ともがき苦しむのも人間です。私は今後どれだけ論文を書けるかわかりませんが、論文が書けなくても、書いても、死の直前まで、自分なりの真実に向かって努力し続ける、しかもフォースターのように「生きる喜び」や「笑い」というものを否定しないで、残りの人生を楽しく歩んでいきたいと思います。

引用・参考文献

- Forster, E. M. ・ *The Longest Journey*, Penguin Books, 1978. First published 1907.
——— ・ *A Room With a View*, Penguin Books, 1964. First published 1908.
——— ・ “The Eternal Moment”, *Collected Short Stories*, pp.188–222, Penguin Books, 1954.
First published 1947.
- Woolf, Leonard. ・ *The Journey not the Arrival Matters* — An autobiography of the years 1939 to 1969 (The Hogarth Press, 1969)
- Woolf, Virginia. ・ *Night and Day*, The Hogarth Press, 1960. First published 1919.
——— ・ *The Voyage Out*, The Hogarth Press, 1965. First published 1915.
——— ・ *To the Lighthouse*, The Hogarth Press, 1967. First published 1927.
——— ・ *Three Guineas*, The Hogarth Press, 1977. First published 1938.
——— ・ *Moments of Being — Unpublished autobiographical writings of Virginia Woolf*, ed. Jeanne Schalkind, Sussex UP, 1976.
——— ・ “Professions for Women”, *The Crowded Dance of Modern Life*, pp.101–106, Penguin Books, 1993.
- スティーヴン・スペンダー『世界の中の世界—自伝—(1)』(高城梢秀・小松原茂雄・橋口稔共訳、南雲堂、1959.)
- E. M. フォースター「私の信条」『民主主義に万歳二唱』Ⅰ (みすず書房、1994) (英語版は1951年に出版)

＊本稿は平成26年2月7日に白鷗大学で行われた最終講義の原稿に基づいた文章である。